
これは現実。

唐務新斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これは現実。

【Nコード】

N81270

【作者名】

唐務新斗

【あらすじ】

弱小チームの熱狂的ファンのボクとアイツはずっと同じチームを愛し、応援してきた。どんなに弱くても、期待を裏切っても、応援し続けてきたはずだったのに、ある日を境に、アイツは変わってしまった。いや、変わったのは……。

ボクとアイツは某球団を心の底から愛する野球狂だ。たとえ弱くても、毎年「今年こそ」と応援し続けてきた。梅雨明けごろには、「今年こそ」が「今年もか」になっちまうのも、毎年のことだった。がな。

それでも、ボクとアイツは馬鹿みたいに、というよりも馬鹿野郎そのものなんだろうなあ、毎日ラジオ放送を欠かさず聞き、スポーツ新聞を買い込み、時には酒の肴に、監督や選手や球団社長を罵倒してやった。それがまたひどく楽しかった。

しかし、今年はひどかった。本当にひどかった。なにしろ、シーズンが始まる前に、主力選手の一人が自動車事故を起こして起訴され、キャンプ中に有力外人助っ人が監督とそりが合わずにボイコットし、満身創痍でシーズンが始まったら始まったで、親会社の脱税騒ぎであわや倒産かと噂され、エース投手は狂信的ファンの集団にストーカーされたストレスで右肩が上がりなくなり、そんなこんなで球団の連敗記録はみるうちに塗り替えられていつてしまった。順位上では毎年の定位置にいたわけだが、ゲーム差から考えれば天国と地獄ほどにも違う。

まったくどうなっちまってるんだ。

とボクもアイツも顔を見合わせればそうばやかすにはいられない。憤りと情けなさがないまぜになったなんともやるせない気持ちで。居酒屋でテレビ放送見ながら球団改革案をでたらめにぶち上げることもあったが、心いくまで強くしようとしたら親会社からなにからなにまで、今までのチームをごっそり入れ替えるべきだ、という結論になってしまい、そうなったらそうなたで、それはボクらが愛したチームじゃあなくなってしまうなあ、とアイツが寂しそうに笑ったのをおぼえている。

そして、長く辛く苦しいシーズンも終盤を迎えていた。世間の注

目は連敗記録をどこまで塗り替えることになるかに集まっていた。野球に興味のないボクの奥さんですら、何連敗かちゃんと把握しているくらいだ。どうやら、ワイドショーネタにまでなってるらしい。レギュラーの一人が芸能人と不倫の挙句、今時心中未遂までやらかしていたから、その関係もあるんだろうな。負けとワイドショーネタ以外の話題しかないなんて球団なんてプロ野球チームとして成立してるのか、それは。

おいおい、どうなっているんだ。

ボクは久しぶりにアイツに合った時、そう思った。

晴れやかな笑顔で、心浮き立っている様子。しかも、本当に幸せそうに、

「もうこれで優勝は決まったも同然だな」

って、おいお前、いつあの独走一位のファンに寝返ったんだ、と問い詰めたら、

「誰がいつ寝返るか、お前こそちゃんと新聞見てるのか」

と逆に罵倒された。話が噛み合わないまま罵倒合戦になり、その流れでボクははたと気がついた。アイツは心の奥底から、あの球団が優勝寸前の絶好調だと信じているのだ。四番の打率、外人助っ人の本塁打数、エース投手の勝ち数、どれもこれも夢のような数字をアイツは次々と挙げていく。

目を開けたまま夢を見ているに違いなかった。

こんななるまで、アイツは球団を愛していたのか。

ボクは悲しくなり、ついには黙り込んでしまった。悲しい？ いや、敗北感かもしれない。

ボクにはとうてい、このどうしようもないダメチームが優勝間違いない無しだなんて思い込めない。

アイツは、球団の優勝を信じようとしないうる者であるボクを冷たい目で一瞥すると、きびすを返して行ってしまった。

喧嘩別れしたまま、アイツは川に飛び込んで水死体になって発見

された。レプリカユニフォーム姿にメガホンを握り締めたまま。世間では、球団が弱すぎることに對する抗議だ、とか言っているようだが、それは断じてちがう。はずだ。

ボクらが愛した球団が連敗記録更新続行のままでシーズンを終えた日の出来事だ。

家で、なんの気もなくテレビを見たら野球をやっていた。そうか日本シリーズだ。しかし、今の僕には何の関係も無い、はずだ。

解説者とアナウンサーの興奮した声が聞こえてきた。

「いやあ、本当に強いですねえ」

「リーグ優勝した時の勢いをそのまま持ってきたという感じですね」とかなんとか。

ふーんそうかそうなのか、と思いながら、ボクはぼんやりと画面を見ていた。なにか違和感を感じる。テレビの中で今球を投げようとしている投手の顔とユニフォームが変なのだ。いや、どちらもよく見知っている。しかし、なんであの最下位球団が日本シリーズに出ているんだ。

これは夢だろうか。

いぶかしみながらも、じわじわと熱いものが身体を巡りだした。夢でも良い！ いつの間にかボクは画面を食い入るようにして見つめていた。

あの人間ピッチングマシンと揶揄された丈夫なだけの男が、さまざま球威と精密なコントロールで打者を翻弄していくさまに、目が話せなかった。

そして、チャンスに弱いたただの四番目の打者と言われた男が、ここぞという場面でホームラン！

そしてついに迎えた九回の裏。

「ストラック、バッターアウト」

主審が叫び、アナウンサーが

「ゆーしょーっっ！」

と絶叫する。

優勝？ 優勝だ！

長年待ち望んでいた夢の優勝！

さあ、どうしようどうしようか。

やることは決まっている気がしたが、それがナンなのか分からないのだ。ボクはおろおろと部屋をうろつく。

すると突如、背後でふすまの開く音がした。振り返ればメガホンとユニフォームをすっかり装備したアイツが仁王立ちしているではないか。

「なにをばやばやしてる！ ぐずぐずするな、さあ、行くぞ」

「おうっ」

ボクは叫び、メガホンを振り上げた。なんでボクはこんなものを手にしているのだろう、こんなユニフォームなんか着ていたっけ？ といったつまらぬ疑問はすぐに狂喜にかき消された。

アイツが駆け出す。ボクも追いかける。喚きたてながら街を走る。身体が熱い。この熱さをどうにかせねばという思いに駆られて。じつなどとしていられなかった。

この身体をほてりを沈める方法はただ一つだ。

アイツがあのだぶ川へと飛び込んだ。そして、ボクもその汚い流れの中に身を躍らせる。

これが俺の夢見た現実なのだ。

（後書き）

日本シリーズが終わると物悲しくなります。ストーブリーグは、勝ちはありませんが、負けが無いのが一番うれしいことですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8127o/>

これは現実。

2010年11月9日14時55分発行